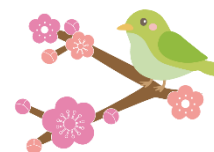




令和の学校教育⑥

絶対評価の中で、学ぶ型の変化を



④ 「目標に準拠した評価」とは

評価のあり方が『相対評価』から『絶対評価』へと移行したのは20年以上も前のことです。『相対評価』とは、「集団に準拠した評価」であり、学年の集団においてどのような位置にあるかを見る評価を指します。通知表でいうと、5がつく人は全体の〇〇%、4がつく人は全体の〇〇%と数が決まっているため、いわば他者との比較の中で成績が決まります。それに対して『絶対評価』とは、「目標に準拠した評価」であり、学習指導要領に示す目標がどの程度実現したか、その実現状況を見る評価を指します。またかつては、「学期末や学年末などの事後での評価に終始してしまうことが多く、評価の結果が生徒の具体的な学習改善につながっていない」という課題があった中で、「指導と評価の一体化」を図り、日々の授業の中で学習状況の改善・向上を行うようにと変化しています。

このような変化の中で大切なことは、各教科の1つ1つの「単元」に対して示された基準をクリアできたかどうかの視点です。授業の中では様々な活動があります。個人作業の課題もあれば、ペアやグループで協同的に取り組む課題もあります。プレゼンテーションなどのパフォーマンスを求める実技的なテストもあれば、筆記テストもあるということです。つまりどの活動もたくさんある評価材料の1つに過ぎず、それらを総合的に評価して通知表の評定を出します。生徒のみなさんにはぜひ、誰かと比べて…というのではなく、教科の単元目標（めあて）を理解し、その基準に対してどうか…という視点を持って、日々の授業に臨み、学びの質の向上を目指してもらいたいと思います。

④ ルーブリック（評価基準表）の重要性

学びの型を変え、単元目標やその1つ1つの授業目標（めあて）を理解して授業に臨むために、もちろん授業する側も型を変える必要があります。ただ教科書を終わらせて、最後にテストのみで評価するようなものではなく、1つ1つの授業で「めあて」を示して、その「めあて」に対しての「振り返り」を通して学びの状況を自覚できるようにしていかなければなりません。そのような中で、ルーブリック（評価基準表）をしっかりと提示した上で、授業を行うことが本校では大切だと考え、今年度取り組みを進めてきました。評価の基準を授業者（先生）と生徒が共有することで、生徒自身が設定しためあてに対する自分の学習過程を自分で測ることができ、成果と課題がより見えやすくなります。そのようなことを決められた授業時数で行っていくためには、生徒主体の学びへの転換が必須となるのです。玉川中学校は自立した学習者を育てるため、引き続き取り組みを進めて参ります。ぜひともご理解のほど、よろしくお願い致します。



≪単元テスト④①・④①予定≫

	1年生	2年生	3年生
④③／4(月) 6限	【1教科】 国語	【1教科】 家庭	
④③／7(木) 6限	【2教科】 数学 / 英語	【2教科】 国語 / 英語	